

中川村の天竜川にかかる坂戸橋

(重要文化財)は、

鉄筋コンクリート製単アーチ橋として

昭和8年に完成し、戦前・戦後を経て、

さまざまな人々が往来し

現在に至っています。

その場所を「たたぎ台」とし、

アンフォルメル(不定形)を考える

ワークショップを行います。

橋のなかで自分が気に入った部分を、

拓本用のやわらかい墨で和紙に写し取り、

クリアブックに入れて

拓本集を作って美術館に展示します。

ワークショップ

石橋をたたいて渡る

10.8 sun — 9:00~11:30

参加者募集

「石橋をたたいて渡る」とは、頑丈な石の橋をさらにたたいて確認しながら渡るように、注意に注意を重ね、とても慎重に物事を行なうことです。細心の注意を払いながら進むという意味が強く、そこに、コロナ禍を体験した私たちの心のありように向けたヒントがあると感じます。

世界で6.7億人が感染し、690万人が死亡した後、日常は戻りつつあるかもしれない、このわずか数年間で世界の見え方は大きく変化し、今まで見ていなかった構造の暗部には、たしかな存在感があります。そうした暗部を遡(さかのぼ)る時、第二次大戦末期の、破壊や殺戮(さつりく)による傷跡が癒(い)えないバリにおいて、のちに「アンフォルメル」と呼ばれる表現を始めていた画家たちが時代を見ていた意識を身近に感じます。

終戦後、そのような表現に共鳴した画家で詩人、実業家の鈴木崧(すずき・たかし)氏が海外との架け橋となる活動をした確信を連想します。これらの人々に想いをはせると、同時代と積極的に行き交い、国際交流をかさねるアーチを組むような考え方と、マイルストーン的な行動がみえてきます。そこに、アンフォルメル表現から現代へ向けた問いがあるといえます。

まだ終わらないコロナ感染と、戦争の時代におけるパンデミック、それに3.11の記憶は、安易に手放してはならない慎重さという心の置き所と、沈黙していく日常への是非を私たちに問うているようです。この問いにすぐに解答できない不定形の気持ちがあるだけだとしても、念には念を入れ、注意には注意を重ねるといふ知恵には、語り残す気持ちを保ち続ける方法があると示唆されます。

身近にある物事を見えるようにする練習として、記念碑的な橋の拓本をとる時、物質に備わっている、時代を記録する機能にふれ、これから解くべき方向を味わうことができるのではないのでしょうか。

アンフォルメルの出自と、私たちの現在とを行き来できる美術の在り方を考えるスペースを組み立てたいと考えています。(北澤一伯)

会場／中川村坂戸橋／アンフォルメル中川村美術館
※雨天の場合はアンフォルメル中川村美術館内

募集／15名(小学生～一般)
※小学生は保護者の同伴が必要です

参加申込／10月5日(木)までに
アンフォルメル中川村美術館へ
(TEL.0265-88-2680)

参加料／300円(当日お持ちください)

指導／北澤一伯(彫刻家／伊那市)

展覧会情報

「新・空間縁起 北澤一伯展 ～書物と空間～」

会場／アンフォルメル中川村美術館

会期／9月28日(木)～10月22日(日) 火・水は休館

時間／9:00～17:00 入館受付16:30まで

入館料／400円 高校生以下無料

アーティストトーク／10月8日(日)13:30～ 入館料が必要

アンフォルメル中川村美術館

〒399-3801 長野県上伊那郡中川村大草2124

TEL:0265-88-2680

E-mail:museuminf@cek.ne.jp

主催:中川村教育委員会

アンフォルメル中川村美術館

助成:長野県地域発元気づくり支援金活用事業

